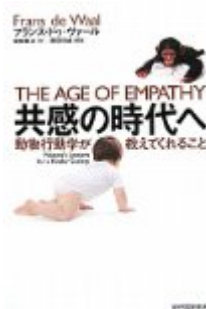


共感の時代へ

The Age of Empathy



タイトル	「共感の時代へ」 - 動物行動学が教えてくれること
原題	The Age of Empathy
著者	フランス・ドウ・ヴァール (Frans de Waal)
訳者	柴田裕之
出版社	紀伊国屋書店
発売日	2010年4月22日
ページ数	364p

フランス・ドウ・ヴァールは、オランダのアーネム動物園での長期研究をもとに「チンパンジーの政治学」(日本語訳は産経新聞出版)というベストセラーを書き、一夜明けたら、有名になっていたという人物です。

今時、強欲は流行らない。世は共感の時代を迎えている。動物行動学の最先端を行く著者によれば、他者の事を思いやり、他者の為に行動しようとする性向、すなわち共感は、人間だけでなく、他の動物にも広く見られる能力だということです。

共感の例として、本文にポンチ絵入りの説明があります。

- ・ ブタの子を育てるベンガルトラの話 - メスのトラにとって生物学的に最適なのは、ブタを育てるより、タンパク質入りのスナックにすることだが。
 - ・ スイカを巡って争うメスたちの喧嘩を仲裁するオスのチンパンジー
 - ・ サルは登り降りするときに助け合うことがある。岩場の難所を登れない子供に背中を貸すマントヒヒなど
 - ・ 海中で気絶した仲間を左右から支え、仲間の噴気孔が水面から出るようにして泳ぐ2頭のイルカ
 - ・ 死んだ仲間の口に食べ物を入れようとするゾウ
- など、本書はれっきとした科学書ですが、心温まるエピソードで溢れており、さながら、ディズニーの世界を垣間見るような感動を覚えます。

更に本書は、さまざまなエピソードやユーモア、鋭い知性に満ち溢れています。

上記ポンチ絵の解説の他にも、

- ・ 親抜き「ベビー・ファーム」
- ・ エンロンと「利己的遺伝子」
- ・ あくびの伝染
- ・ 共感する脳

- ・ 痛みに同情するマウス
 - ・ ミラーニューロンの発見
 - ・ 人間を看取る猫のオスカー
 - ・ 慰めの抱擁
 - ・ 動物たちの利他行為
- など、面白いテーマは数え挙げればきりがありません。

「忠犬ハチ公」の話も登場します。主人の死後も駅前で待ち続けるハチの心中はいかなるものだったのでしょうか？

- ・ ハチは、主人がこの世を去ったことを知らずに、ただ習慣に従って行動していたのでしょうか？
- ・ それとも、それを知りながら、あきらめ切れずに、思い出の場所にやって来ては、主人を偲んでいたのでしょうか？

そのことを考えるだけで我々は切ない気持ちになってしまいますね。

我が家でも、柴犬を4代にわたって飼っていますが、前者と後者の入り混じった複雑な気持ちだったのではないかと、我が家の犬たちを見ていると感じます。犬は苦もなく私たちの気持ちを読み取るし、私たちが難なく彼らの気分を読み取ることができるからです。

ドウ・ヴァールはリチャード・ドーキンスとの交流があります。ドーキンスとドウ・ヴァールはともに文章で相手を批判しているようです。ドーキンスは動物の親切心に関してドウ・ヴァールが自分の都合の良い解釈をしていると批判し、ドウ・ヴァールはドーキンスが誤解されやすいメタファーを作り出したことに苦情を述べるというやり取りです。

ドウ・ヴァールは「利己的な諸原理に基づく社会を正当化するために、生物学的特質まで担ぎ出された」としてドーキンスを責めますが、これらはエンロン(エネルギー企業)の輪番停電とドーキンスの「利己的な遺伝子」の話につながっており、さらにミルトン・フリードマンの経済学まで遡らなくてはなりません。興味をお持ちの方は深読みをお勧めします。

利己的な動機と市場の力だけに基づいた社会は、富を生みだすかも知れないが、人生を価値あるものにするまともな相互信頼は生み出せない。として、次のような例を挙げています。

すなわち、アメリカ企業の CEO の収入は、平均的な労働者の収入の優に数百倍に達し、アメリカのジニ係数(所得格差の物差し)はかつてないほど上昇している。アメリカは、「勝者独り占め」社会になり、所得格差はアメリカの社会機構を脅かしている。アメリカ人の平均寿命は世界で40位以下だといわれており、所得格差が大きい州ほ

ど死亡率が高いといわれている。収入格差が相互の信頼関係を損なって、マイナスの影響は社会全体に及ぶ。とし、

- ・ 人類は、今後自分達の共同体を平和なものにしていくことができるのだろうか？
- ・ 人類は、「自然破壊」や「生物多様性存続の危機」を克服して、他の種と共存していくことができるのだろうか？

などを、暗に問いかけています。

著者が、豊富な実験や観察例を挙げながら、「共感」が進化史上哺乳類に共通の特性であることを明らかにし、この本質を無視したために壁にぶつかってしまった現代社会を、「共感」を基盤とする「まとまりと生きる価値を重視する」新たな社会とするよう提唱しています。著者は、これらの問題に対して、共感の堅固さを信じており、その見解は肯定的ですが、社会科学的視点に欠けるくらいがあり楽観的過ぎるのではないかという疑問もあります。

本書は、素人にも判りやすい文体で書かれており、人間だけでなく、他の動物にも広く見られる共感に着目して、未来への提言を行っています。ドウ・ヴァールは日本の研究者と最も波長の合う霊長類研究者であると言われており、本書は様々な考えを誘発してくれる箇所も多く、特に、これから動物行動学を勉強しようと考えている若い諸君にはお薦めです。

2010. 8. 13